

《第二十三章・誤りを考察する。》

第二項 [煩惱が本性として有ることを否定する] に三項目がある。[章の著述を説く]、[了義の教証と合わせる]、[意味を要約して章の名を示す] である。

第一項 [章の著述を説く]

ここに言う。「有（輪廻）の継続は本性として有る。（何故ならば）その因が本性として有る故である。ここで、煩惱より業が起り、業と煩惱の果である生と死が一から一へと連なることも生じるが、それも有（輪廻）の継続である。主要な因は煩惱である。（何故ならば）それを捨て去れば、業が有ろうとも有（輪廻）の継続は退く故である。」

「もし、煩惱が本性として有るならば、有（輪廻）の継続は勿論本性として有ろうが、それは無い。」と否定するにあたり二項目がある。[煩惱は本性があることを否定する]、[その理由である、それを捨て去る方法が本性として有ることを否定する] である。

第一項 [煩惱は本性があることを否定する] に五項目がある。[縁起の理由によって否定する]、[拠所は本性として無いという理由によって否定する]、[因は本性として無いという理由によって否定する]、[対象は本性として無いという理由によって否定する]、[因は本性として無いという他の理由によって否定する] である。

第一項 [縁起の理由によって否定する]

経部より、貪欲と瞋恚と愚痴は正しくない妄分別より起こると説かれた。

「欲よ。お前の根本は、知り、分別する（全く考える）ことより起こった。」と経部より現れる故である。三毒のみを言及したことは、一切の他の煩惱はこの三つの果であるので、この三つが主要である故である。それも、好ましい様相に依拠したことより貪欲と、好ましくない様相に依拠したことより瞋恚と、まさしく誤りに依拠したことより愚痴が全く起こり、妄分別とはその三つの共通の因である。

『縁起経』より、

「無明の因は何かといえば、正しくない作意である。」

や、

「穢れのある作意より愚痴は生じるのである。」

と説かれた故に、愚痴は妄分別より生じると知る。

好ましい対象と、好ましくない対象と、誤った対象に依拠して起こるそれらのは本性より無い。（何故ならば）貪欲等が本性として成立したならば本性は作られたものではなく、他である因や縁に相互関係することは無い故に、好ましい等の

対象に依拠して起こらないものであるが、好ましい等の対象に依拠して起こる。それ故に、貪欲等のそれらの煩悩は清浄に無く、それも「勝義として無い」や「本性として無い」という意味である。これによって、否定対象に「正しく」等の特性を付けておらずに否定したならば不可であると示し、他にも同様である。愚痴の因である妄分別とは、誤りであり、(以降で) 説くことになるが、貪欲と瞋恚の二つの因である妄分別は、好ましい・好ましくない様相を捏造する正しくない作意である。

他の二阿闍梨<sup>1</sup>が、第一偈の意味は「三毒より起こるので、本性として有る。」というその返答として、第二偈でそれを否定され、「好ましいと、好ましくない誤り」という、二つ(の誤りである)と説かれた。

果が因より起こることは、中観派は本性が無い理由として承認するが、实在論者は本性として有る理由であると言うので、双方の面より説き得るので矛盾しないが、『空七十論自註』において好ましい等の三つは順次三毒の因であると説かれた。妄分別の力によって生じることについて、自相として有ることが欠如することは論証し易いので、まさしくそれがその理由であるとも説かれ、『空七十論』より、

「何故ならば、それを欲し、それに怒り、それに蒙昧である故に、それらは、妄分別によって生じさせられる。妄分別も、まさしく正しく有るのではない。」

2

と説かれた。

第二項 [拠所は本性として無いという理由によって否定する] に二項目がある。[我は拠所として無いという理由によって否定する]、[心は拠所として無いという理由によって否定する] である。

第一項 [我は拠所として無いという理由によって否定する]

我の有性と無性は、如何様であろうとも本性として成立したことが無いことは、「我を考察する」<sup>3</sup>等で既に述べた。それが無い故に、その我に依拠した諸煩悩の有性と無性が本性として成立したことが、如何様に有るとなろうか。(そうは) ならない。

もし『我の有と無が本性として無いことによって、煩悩の有と無が本性として成立しないという理由は何か。』と思えば。

諸煩悩は壁面の絵の如く生じさせられるものである分別に相互関係したので、これらの煩悩は何らかの拠所の(所有する)ものであるとなり、拠所無くしては無い。

1 他の二阿闍梨：仏護『ブッダパーリタ』と清弁『般若灯論』。

2 「何故…ではない。」：『空七十論』第 60 偈。「何故ならば、まさしくそれに執着し、それに怒り、それに蒙昧である。それ故に、分別として生じさせられる、その分別もまさしく正しいものとして無い。(シュンヌ・チョク訳)」

3 「我を考察する」：『根本中論』第 18 章。

その拠所も考察されたならば、我、あるいは一有情であるけれど、それは前述で詳細に既に否定したので、本性として成立したことは有るのではない。拠所である我、あるいはプトガラ<sup>4</sup>が何も無くして、如何なる拠所のものであろうとも、諸煩悩は本性として有るのではない。

第二項 [心<sup>5</sup>は拠所として無いという理由によって否定する]

「仮に、先に成立した煩悩の拠所も承認しないけれど、拠所となった我も勿論無いとしても、煩悩を持つ心に依拠して諸煩悩は生じることになり、その心も煩悩と一緒に生じる。」と言っている。

自らの身体を見つめる有身見<sup>6</sup>が捉えた対象であるその我は、五様相において分析したならば有るのではないが如く、煩悩化する諸煩悩は、煩悩化される「煩悩を持つもの」に五様相として無い。

そこで、「煩悩を持つ心そのものが、心所<sup>7</sup>である煩悩である。」とは正しくない。(何故ならば) 行為者と行為対象の二つが同一となる故である。その二つは自相として、他としても無い。(何故ならば) 「他として」とは、相互関係しなくなる故である。本性として同一と別の何れとも無い故に、互いに所依<sup>8</sup>と能依<sup>9</sup>や、具有も自性として無い。

自らの身体を見つめる有身見<sup>6</sup>が捉えた我は五様相として無いが如く、煩悩を持つ心も煩悩に五様相として無いことは前述の如く当てはめる。これは副次的な意味である。

第三項 [因は本性として無いという理由によって否定する]

もし「諸煩悩は本性として有る。(何故ならば) その因である好ましい・好ましくない・誤りが本性として有る故である。」といえば。

好ましい対象・好ましくない対象・誤った対象は、自らの本性より一自性として有るのではない。(何故ならば) 縁起である故と、それらが本性として有ることは否定することになる故である。それ故に、好ましい・好ましくない・誤りに依拠して起こったそれら諸煩悩は、本性として有るのではない。

4 プトガラ：心身の集積に名付けられた「者」。[序論] 脚注 50 参照。

5 心：心王。知覚作用において主となる主体。[第 1 章] 脚注 26 参照。

6 有身見：自らの五蘊（心と体の集積。[序論] 脚注 88 参照）の何れかを捉えることから起こる、「我（私）」と「我所（私のもの）」はその自相として有ると思ひ込む、煩悩となる見解。主な五つの誤った見解（五見<sup>ごけん</sup>）の一つ。[第 1 章] 脚注 104 参照。

7 心所：一時的に起こる知覚作用・心理作用。[第 1 章] 脚注 27 参照。

8 所依<sup>しよえ</sup>：よりどころ。[第 1 章] 脚注 342 参照。

9 能依<sup>のうえ</sup>：よるもの。[第 1 章] 脚注 343 参照。

## 第四項 [対象は本性として無いという理由によって否定する]

「諸煩悩は本性として有る。(何故ならば) それらの六対象が本性として有る故である。」といえは。

そこで色形に適うので色形や、響き示すので音声や、味わわれ経験されるので味や、吸われ嗅がれるので香や、触られるので触や、定義を保持するので、あるいは法(現象)の最高のものである涅槃を保持するので法(現象)であり、六様相はここに留まるので拠所一対象である。何者かの心を喜ばせるので欲望や、心を批判させるので瞋恚や、心を愚痴とさせるので愚痴の拠所であり、それらを好ましい様相に捏造したことによって貪欲が、好ましくない様相に捏造したことによって瞋恚が、恒常・実我等に捏造したことによって愚痴が生じる。それらが君によって煩悩の拠所と名付けられたことは勿論真実ではあろうが、色形と音声と味と触感と香と法(現象)だけ一ただ仮設されたのみに尽きるが、本性として成立したことは無い。

もし本性が無ければ、この対象は如何様なものかといえは、本性が無いながら対象とされることは、尋香の都のように、また逃げ水や夢に似るのである。

第五項 [因は本性として無いという他の理由によって否定する] に二項目がある。[貪欲と瞋恚の因が本性として成立したことを否定する]、[愚痴の因が本性として成立したことを否定する] である。

## 第一項 [貪欲と瞋恚の因が本性として成立したことを否定する]

それらが尋香の都等のように、誤りから、本性として無いにも拘わらずそのように認識されるのみに尽きる時、幻の人のような、そして影像に似るそれらの六境<sup>10</sup>に一それらの本性として有る好ましい性相や、好ましくない性相が起こるとも、何処でなろうか。(そうは) ならない。(何故ならば) 誤った拠所の力によって起こった故である。

斯くも、

「我執より起こった諸蘊。その我執は意味として偽りである。偽りであるその種子の、生が真実であると如何でなろうか。」

と説かれた。それらは拠所が誤っているので、好ましい・好ましくないという様相は偽りであると示す正理である。

ここで、互いに依拠する理由によっても偽りであると示された。ここで好ましい・好ましくないとは長短のように互いに相対して有るけれど、相対せずに無い。そう見れば、好ましくないものに依拠して一相対して「好ましい」と名付けられ一設けられる相対相手である「好ましくない」とは、「好ましい」に相対せずに有るのではないので、それ故に好ましい対象が自性として有ることは合理ではない。(何

<sup>10</sup> 六境：六つの対象。色形・音声・香・味・触感・法(現象)。

故ならば) 好ましくない対象は、好ましいに相對したならば自性として無いけれど、相對相手が自性として無ければ、相對する現象が自性として有ることは矛盾する故である。好ましい対象であるものに依拠して一相對して、好ましくないと名付けられる一設けられた相對相手である好ましいは、好ましくないに相對せず有るのではないので、それ故に、好ましくないが自性として有ることは合理ではない。

そのように好ましい様相が自性として有るのでなければ、その因を持つ貪欲があると何処でなろうか。好ましくないという様相が自性として有るのでなければ、その因を持つ瞋恚があると何処でなろうか。(何故ならば) 因が無い故である。

第二項 [愚痴の因が本性として成立したことを否定する] に四項目がある。[誤りが本性として成立したことを否定する]、[誤りを具えるものが本性として成立したことを否定する]、[誤りの対象の有無を考察して否定する]、[そのように否定することは重要であると示す] である。

第一項 [誤りが本性として成立したことを否定する] に三項目がある。[常見が誤りとして、本性として成立したことを否定する]、[無常であると捉えることは誤りではないと、本性として成立したことを否定する]、[ただ捉えることのみが本性として成立したことを否定する] である。

第一項 [常見が誤りとして本性によって成立したことを否定する]

ここで四つの錯誤がある。刹那毎に壊れ無常である五蘊を『恒常である。』と思うことと、苦しみである近取の蘊を『楽である。』と思うことと、不浄である身体を『清浄である』と捉えることと、我の性相と合致しない蘊を『我である』と執することである。その四つは愚痴の因である。そこで『我である』と執することは、それ以前にある愚痴の類似種が後の因を為すが、他の三つは俱有縁ともなる。<sup>11</sup>

もし、「恒常が欠如する無常である蘊を『恒常である。』とそのように捉えることは誤りである。」と設けるならば、自性として有ることが欠如する蘊において、「無常である」と自らの本質として有るのではないので、蘊を恒常であると執することが如何様であれば誤りであると、本性として成立しようか。そうではない。

その如く残りの三つにも当てはめ、「もし、苦しみを楽であると、そのように捉えることが誤りであるならば、空に苦しみは有るのではないので、(そう) 捉えることは如何様に誤りであるのか。」という論法によってである。

<sup>11</sup> 我である…なる。: 俱有縁とは副次的な条件。前述の四種の錯誤のうち最後の「我の性と合致しない蘊を『我である』と執すること」は、愚痴に様相の似た心理作用が後の錯誤の実質的な原因となる。しかし、愚痴に様相の似た心理作用は、他の三種の錯誤が生じる副次的な条件となり、実質的な原因とはならない。

他の二つの大註釈<sup>12</sup>には、

「もし、無常を恒常であると、そのように捉えることが誤りであるならば、空に恒常が有るのではないので、(そう) 捉えることは如何様に誤りでないのか。」<sup>13</sup>

とある。

第二項 [無常であると捉えることは誤りではないと本性として成立したことを否定する]

もし、「無常を『恒常である。』と、そのように捉えることは誤りである。」とするならば、本性として無い事物において無常も本性として無いので、本性として有ることが欠如するものを『無常である。』と捉えることも、如何様であれば誤りでないものとして、本性として有ろうか。(本性として) 無い。無常であると捉えるものは誤りの無い知覚であると、本性として成立したならば、無常は誤りの無い所知として、本性として成立しなければならないという論理である。

そのように、蘊を基にして恒常・無常の双方が誤りの無い所知として、自性として無ければ、その二つ以外の自性として成立した誤りの無い所知は、何も無い。それが無い故に、本性として成立した何かしらの誤りのない所知に相對して、誤りとなる何が有ろうか。

その如く残余の三つにも当てはめる。「もし、苦を樂であると、そのように捉えることが誤りであるならば、空を苦そのものであると、捉えることも如何様に誤りでないのか。」という論法によってである。

「常見が錯誤として、本性として成立したならば、無常は誤りではないと、本性として成立したのでなければならない」という正理である。

第三項 [ただ捉えることのみが本性として成立したことを否定する]

「もし、常見は誤りとして、本性として成立していないようであるとしても、先ず、ただ捉えることのみは本性として有る。そこで『捉える』とは、行為としての本性である。それにおいても疑いなく、恒常等のそうさせるものと、我か、心である行為者と、色形等の行為対象も有る必要がある。それらが本性として成立したならば、吾輩の望みは適う。」といえは。

或る行為するものが捉えることと、捉えることである行為と、捉える行為者と、捉えられたものである行為対象の一切が寂滅し一本性として生じていない故に、ただ捉えることのみ(単に捉えること)は本性として有るのではない。

行為するものが無いことは

<sup>12</sup> 他の…注釈：『ブッダパーリタ』と『般若灯論』。

<sup>13</sup> 「もし…ないのか。」：『根本中論』第 23 章 13 偈。

「もし、無常を無常であると、」<sup>14</sup>

等や、行為者が無いとは

「我の有性と無性とは、」<sup>15</sup>

等や、認識対象が無いとは

「色形と音声と味と触感と、」<sup>16</sup>

等によって既に示した。

あるいは、第一章<sup>17</sup>等で行為するものと事物と行為者と行為対象一切は生じていないと示したので、捉えることは無い。

第二項 [誤りを具えるものが本性として成立したことを否定する]

もし、「誤りは本性として有る。(何故ならば) 誤りを具える祭祀が本性として有る故である。」といえ、これを否定するにあたり三項目がある。[具わるものは本性として無いので、具える者が本性として有ることを否定する]、[誤りの拠所が本性として成立したことを否定する]、[誤りが本性によって生じたことを否定する]である。

第一項 [具わるものは本性として無いので、具える者が本性として有ることを否定する]

捉えるもの(認識するもの)の支分となった行為するものと、行為者と、行為目的は本性として無いと既に前述した故に、誤りか正そのものとして一誤り無く捉えることが本性として有るのでなければ、拠所である如何なるプトガラに誤りや、誤りでないものが本性として有ろうか。(本性として) 無い。

第二項 [誤りの拠所が本性として成立したことを否定する]

他にも、この誤りをプトガラの拠所においてであると主張すれば、既に誤りとなった等の三様相を超えることは無いが、それも、既に誤りとなったものに諸々の誤りが本性として有ることはあり得ない。(何故ならば) それがあり得るならば、誤って捉える者であるとする「誤り」より別義の誤りを具えなければならないが、そ

<sup>14</sup> 「もし…あると、」:『根本中論』第 23 章 13 偈。「もし、無常を恒常であると、そのように捉えることが誤りであるならば、空に恒常は有るのではないので、捉えることは如何様に誤りでないのか。」

<sup>15</sup> 「我の…とは、」:『根本中論』第 23 章 3 偈。「我の有性と無性とは、如何様にも成立することは無い。それが無く、諸煩惱の有性と無性は如何様に成立しようか。」

<sup>16</sup> 「色形、…触感と、」:『根本中論』第 23 章 8 偈。「色形と音声と味と触感と、香と法(現象)のみであり、尋香の都のようであり、逃げ水や夢に似るのである。」

<sup>17</sup> 第一章:「縁を考察する」。

れにその後者（である誤り）は必要無い故である。

誤りとなっていないプトガラに諸々の誤りはあり得ない。（何故ならば）仏陀にも誤りが有る背理となる故である。

誤りとなりつつあるものに誤りが本性として成立したことはあり得ない。（何故ならば）失壞したか生じていない誤る行為以外の誤りは本性として無い故と、一部が誤りであり一部は誤っていない、誤りつつあるも、先の二考察による過失を超えられぬ故である。

そのように、「三時制の誤りの如何なる拠所においても、誤りが本性として無ければ、如何なる拠所において、誤りが本性としてあり得ようか」と、自分自身が公平な心で尽く分析したまえ。

### 第三項 [誤りが本性によって生じたことを否定する]

他にも、諸々の誤りが本性として生じていないならば、如何様であれば本性として有るとなろうか。（そうは）ならないが、諸々の誤りが本性として生じることが無ければ、誤りを持つものであるプトガラが本性として成立したことが何処であろうか。（それは）無い。本性として生じない理由とは、誤った事物は自らより生じず、他よりまさしく生じるのでもないが、自と他の集合よりも生じるのでなければ、誤りは本性として無い故に、誤りを持つものであるプトガラが本性として成立したことが何処にあるか。（それは）無い。

### 第三項 [誤りの対象の有無を考察して否定する]

「もし、我と、清浄と、恒常と、楽が本性として有るならば、誤った所知<sup>18</sup>ではないことになる。（例えば）無我等の如くである。」と、単に他者に示す因が成立しただけの喩例である。

もし、我と、清浄と、恒常と、楽が本性として無ければ、無我と不浄と無常と苦も、本性として有るのではない。（何故ならば）否定対象が無ければ、それを否定したものは真実として成立しない故である。そのようであれば、無我は自らの本質として無い故に、無我等の四つが本性として有ることも、誤った所知となる。（例えば）我等の如くである。それ故に、解脱を欲する者は八つともの誤りを捨て去りたまえ。

### 第四項 [そのように否定することは重要であると示す]

前述のように、誤りが自らの本質として有る・無いを正理によって分析するこれは大きな意義を持つものであり、その前述のように、瑜伽行者によって誤りは認識されていないので誤りは滅すとなるが、それが滅したことによってその因を持つ無

<sup>18</sup> 所知：知る所のもの。知覚対象。有と同範囲。



明<sup>19</sup>が滅すとなる。無明が滅したとなれば、行等、一切の輪廻の後の支分が滅すとなる。(何故ならば) それらは無明の因を持つものである故である。

第二項 [その理由である、それを捨て去る方法が本性として有ることを否定する]

「もしそう見るならば、無明等の煩惱を捨て去るもの等が本性として有る故に、諸煩惱は本性として有るので、有(輪廻)の継続は本性として有るとなる。」といえ。

煩惱を捨て去ることが本性として有るならばそのようになるけれども、それは無い。このように「もし、幾らかのプトガラ(五情)の煩惱であるものが本性として有るならば、如何様であれば対治<sup>20</sup>が捨て去るとなろうか」といい、(捨て去ると)ならない。(何故ならば)「本性として有るものを如何なる修行道が捨て去ろうか」といい、斥けることができない故であり、本性に退くことは無い故である。

「もし、幾らかのプトガラ(五情)の煩惱であるものが本性として無ければ、如何様であれば捨て去るとなろうか」といい、そうはならない。(何故ならば) 自らの性相として成立した論法に沿えば、本性が無ければ全く無いので、皆無を如何なる対治が捨て去ることをしようか—しない故であり、火を如何なる冷涼によっても斥けることができぬが如くである。

自説においては、「本性として無い」ことにおいて対治が所断<sup>21</sup>を捨て去ることは非常に合理であると勿論主張するけれども、対論者に対して、「本性として有る」ことにおいて捨て去ることは不合理であると示す場合に二つの方法があり、前述のものと、捨て去ることを自らの性相として承認した面から過失を述べることである。それらの方法を、その類似種全てにおいて知りたまえ。

第二項 [了義の教証と合わせる]

「そのように、因(実質的原因)縁(副次的原因・条件)と共に貪欲等の煩惱や、恒常・無常等の諸々の認識対象と認識主体は本性が無いと正理によって決定したまさしくそれは、深甚な教証によっても成立したと、そのように善説より説かれた一切は本章によって説明したまえ。」と示す為に、了義の教証と合わせた一部のみを述べれば、『堅増上心請問經』より、

「種姓の子よ。ここで比丘と比丘尼と、優婆塞と優婆夷の一部が、生じておらず起こっていない諸法について好ましくないと作意し、無常と苦と、空と無我であると作意することも、それに似ていると見よ。

私は、それら愚か者達を『道を修するのである』とは言わず、それらの者

<sup>19</sup> 無明：無知。輪廻の十二縁起の第一。[第 1 章] 脚注 75 参照。

<sup>20</sup> 対治：煩惱等、捨て去るべきものに対する対策。無我を悟る智慧など。

<sup>21</sup> 所断：捨て去る所のもの。捨て去るべきもの。煩惱等。

を『誤って入った』という。」

と、変幻の女性を見て本物の女性であると誤り欲望が生じたけれど、その女性について好ましくない等と作意することを例として説かれ、また本経より、

「種姓の子よ。凡夫である幼子達は、欲望の果てを知らずに欲望の果ての恐怖によって畏怖し、欲望の果てより出離することを探求する。瞋恚の果ては何も無い果てであると知らずに、瞋恚の果ての恐怖によって畏怖し、何も無い果てより出離することを探求する。愚痴の果ては空性の果てであると知らずに、愚痴の果ての恐怖によって畏怖し、空性の果てより出離することを尽く探求する。私は、それら愚か者達を〈道を修するのである〉とは言わず、それらの者を〈誤って入った〉という。」

と説かれた。

### 第三項 [意味を要約して章の名を示す]

そのように、自らの性相（定義）として成立したことにおいて、好ましい対象等であると尽く考えることより諸煩惱が起こることや、恒常等であると捉えることに対して誤・不誤の分別や、煩惱を捨て去ること等は全く適わないが、自らの自性として有ることが欠如することにおいてそれら一切が殊更合理であるさまに確信を導きたまえ。

「誤りを考察する」という二十五偈の我性、第二十三章の解説である。